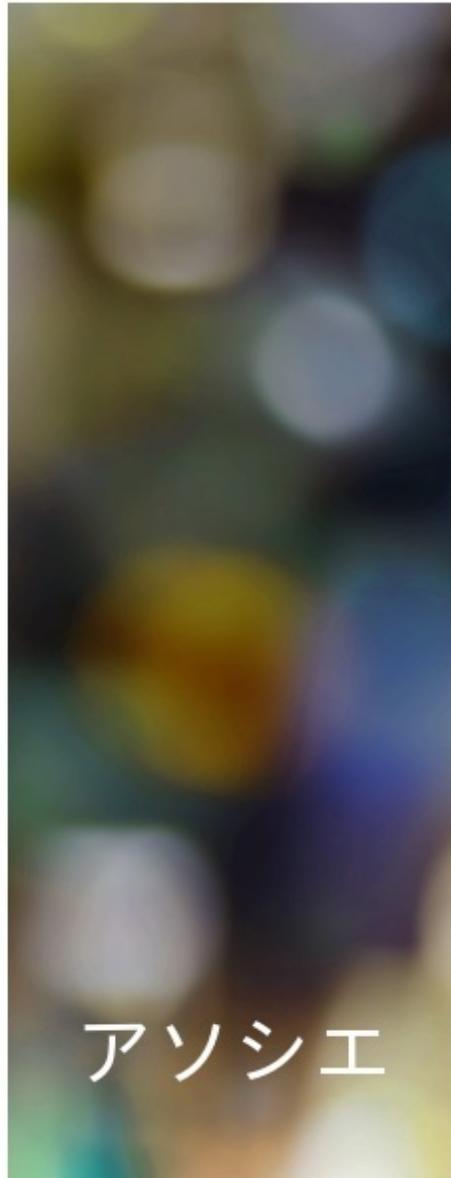


# タイムライン



思わず目をそむけた。

画面に流れるテキストの洪水。

時間帯によっては、疾走する、大量の玉石混交な情報を選び取り、宝石なのか、ただの石ころなのか判断するには、相当なりテラシーを必要とする。

流れるタイムラインを見ていると、つい我を忘れてしまう。

駅だろうと、道の途中だろうと、ディスプレイの中の世界に、没頭してしまうのだ。

朋子は、顔をあげた。電車の車窓から、今ここがどこなのか、手がかりを懸命に探した。

もうすぐ乗換の駅だ。気づいた途端、電車が駅に到着した。

つい夢中になって、乗るべき電車に乗らずに見送ったり、降りるべき駅で降りそびれることがしばしばある。

今日はラッキーな日なのかもしれない。

中堅どころの4年制大学を卒業して新卒で入社した朋子。

しかし同期入社仲間たちのきらびやかな学歴を知って、「このままでは取り残される。」と、すぐ危機感を抱いた。

語学、資格試験、読書、セミナー、通信教育など、思いつくまま、朋子は学び続けた。

昇格試験を受ける際に書いた身上書は、これまでの努力で真黒に埋まった。

しかし、その年の昇格者のリストの中に、朋子の名はなかった。

同期に遅れること1年で、朋子もようやく昇格した。

その喜びも束の間、朋子は途方に暮れた。目標を見失ってしまったのだ。

「これから何に頑張ればいいのか。」

しばらくすると、朋子は人事異動であちこちの部署を転々とするようになった。

友達は早くに結婚退職して母親になった者もいれば、転職を繰り返す者、起業した者もいるが、朋子は彼女達を、憧れとあきらめが混ざった視線で眺めるだけだった。

「何かが間違っているような気がする。でも、何が？」

彼女達は、さして努力もせず、いともたやすく、今の幸せを掴んでいる。

私の努力の何が間違っていたのだろうか。

「あなたは今のあなたでいい」

自己啓発の書籍でその言葉に出合った時、朋子は吹き上がる怒りを抑えきれなかった。

その夜、バスタブの中で、朋子は久しぶりに声を殺して泣いた。

そして泣いている自分が許せなくて、さらに泣いた。

「オフ会やります！参加希望者はこちらをクリック！」  
タイムラインをぼうっと眺めていた朋子は、ある日こんな投稿を見つけた。  
書かれてあるURLを思わずクリックすると、会場は会社の近くだった。  
これまでこういうイベントに参加したことはない。  
告知のWebサイトを見ていると、何人かが既に申し込んでいるようだ。  
朋子は、無意識に参加ボタンをクリックしてしまった。

会社の近くということで、ついのおんびりとしていたために、会場に着いたのは、開始時間ギリギリだった。  
予想以上の人の多さに、受付が混乱している。  
やっと会費を支払い、会場を見渡すと、おそらく同世代だと思われる女性の横が空いている。  
あまりの混雑ぶりに、参加を後悔しかけていた朋子は吸い寄せられるようにその席に座った。  
申し込みの時には、見慣れたアイコンがあったので、安心していただけだったが、当然のことながら、  
アイコンと本人の見分けがつかない。  
席についたばかりなのに心細くなって、今すぐ帰りたくなってしまった。  
しかし朋子が席についたと同時に、幹事の挨拶が始まり、続いて乾杯の音頭となった。

「かんぱーい！」  
まるでお互いが旧知の仲であるかのように、飛び切りの笑顔でグラスをぶつけ合う人々。  
一口目を飲み干した後、ハイテンションな空気の中、オフ会は始まった。  
その雰囲気気圧された朋子の周りは、まるでエアポケットに落ちたように、急速に  
盛り下がってしまっている。朋子に話しかける人は誰もいない。

「あの、私ハンドルネームは、ひかりと言います。はじめまして。こういう会にはよく来られるんですか？」  
ぎこちなさを隠そうとしたのか、彼女は棒読み気味に、一気に言い切った。  
「いえ、私も初めてなんです。あ、私のハンドルネームは朋子と言います。はじめまして。」  
突然のことに驚きつつも、ひかりのぎこちなさに勇気を得て、朋子は答えた。  
ひかりもそんな朋子の言葉に安心したのか、堰を切ったように話し始めた。  
もともと聞き役の方が得意な朋子だ。朋子にとって、ひかりのような存在は、とてもありがたかった。

ひかりは、最近転職したばかりのWebデザイナーだった。  
おそらく朋子よりも少し若いようだ。  
ひかりに問われるままに答えていると、自分でもこんなことを考えていたのかと思うようなことをすらすらと  
話してしまっていて、朋子自身とても驚くのがあった。

「ところで、朋子さんのID教えてくださいよ。どんなアイコン？」  
と、ひかりに訊かれ、慌ててスマートフォンを取り出し、専用アプリケーションを起動する。  
「これ。」と、自分のプロフィールのアイコンを見せるとひかりは、  
「えー、私このアイコン知ってる！私たち相互フォローしてるよね？何回かりプライももらったこともあるし。  
ちなみに私のはこれ！」  
朋子にもすぐわかった。そうか、このアイコンがひかりだったのか。

「私、朋子さんの投稿、すごく好きなの。最近あまり見なくなって、ちょっと心配してたんだ。  
でも会えて嬉しい！だって、いつもすごいなって思って憧れてたから。」  
思いもかけない出会いと褒め言葉に、朋子の声は言葉にならなかった。  
「そんな・・・。すごくないよ。」と自分では言おうとしたが、何だかうまく声にならなくて、もごもごとした

つぶやきになってしまった。こんなとき、もっとスマートな受け答えが出来たらいいのに。  
軽く落ち込む朋子をよそに、ひかりはさらに元気になり、朋子を質問攻めにし始めた。  
最初はそんなひかりに戸惑いながらも、いつしか朋子も大きな声で笑っていた。

オフ会以降、朋子とひかりは、急速に親しくなった。

会社が近いこともあり、よく食事にも行ったし、休日にも頻繁に遊びに行く友達になった。オシャレな雑貨屋をぶらぶらしたり、カフェで時間を忘れて語り合ったりすることがとても楽しかった。

そういえば、と朋子は思う。

こんな風に時間を過ごせる友達って、いなかったな。

ある日、雑貨店を見て回っているときに、ひかりはこんなことを言いだした。

「ネットを通じて、こんなにも気の合う友達が出来るとは、思ってもみなかった。」

ショーケースに飾られた職人の手仕事の万華鏡を見て、ひかりが言う。

「朋子さん、ほら見て。私ね、タイムラインって、まるで万華鏡みたいだなあって思っていたの。」

一定時間が経てば、いろんな人たちの声が入れ替わって行って、見える世界がくるくる変わっていくんだよね。

その声がキラキラしていて、見ててまぶしくなってくるんだ。

私はずっと覗いていただけだったけど、朋子さんに会って、自分がそのキラキラの仲間入りが出来た気がする。

朋子はそんな風に考えたことはなかったが、その話を聞いて、「彼女らしい。」と思った。

「そうそう、万華鏡って作れるんだって。こないだフリーペーパーに載ってたの見たよ。

今度一緒に作りに行かない？」

ひかりの笑顔につりこまれるように、朋子は大きくうなづいた。